

『続詞花和歌集』の一考察

——赤染衛門と和泉式部の入集歌をめぐって——

A study of "Shokushikawakashū"
—Akazomeemon's waka and Izumishikibu's waka—

鈴木徳男

はじめに

藤原清輔の和歌観を知るてがかりとして、『続詞花和歌集』（以下『続詞花集』と略称する。他に勅撰集も同様）、『袋草紙』雑談をめぐり、その能因観はすでに発表したことがあるが、本稿では赤染衛門と和泉式部をとりあげ若干の考察を加えたい。和泉式部と赤染衛門について、周知のように『紫式部日記』中に対照的な人物評がみえるが、

【袋草紙】に次のようにある。

和歌者人ノ心々也。定頼卿問^二四条大納言^一云、式部・赤染何勝歌読候哉。答云、非^二一口之論^一。式部ハコヤトモ人ノイフベキニトイフ歌ヨム者也云々。定頼云、式部歌ニハ、ハルカニテラセ山ノハノ月ヲコソ世以称^二秀歌^一云々。如何。答、不知^二案内^一也。クラキヨリクラキミチハ経文也。イカデオモヒヨリケムトモ不可^レ思。末ノハルカニテラセハ、彼ニ被^レ引て出来レル詞也。コヤト

【続詞花和歌集】の一考察

モ人ヲトイヒヨキテ、末ニヒマコソナケレトヨムハ、凡夫ノ可^レ思寄^二事ニ非ズト云々。而江記云、良暹云、式部・赤染共以歌仙也。但、赤染、鷹司殿御屏風歌十二首中十首ハ秀歌。又、賀陽院歌合時、多^二秀歌^一。如^二屏風^一ハ式部不可^レ及^二彼人^一云々。

予案^レ之、仰テ可^レ信^二大納言之説^一。何付^二良暹之儀^一哉。但、誠ニモ如^二哥合^一ハ赤染憶歌読也。又、式部歌不^レ入^二度々歌合^一。所謂花山院并長元等也。

「和歌者人ノ心々也」として取り上げている公任の和泉式部、赤染衛門の優劣論は『俊頼髓腦』からの書承であり、清輔は『江記』から良暹法師の評を載せ、公任説を承認する私見を述べている。『袋草紙』は『続詞花集』の編纂とはほぼ同じころに二条天皇に奉ったものであるから、以上の記事は和泉式部、赤染衛門の詠歌を選択批評する過程で抱いた清輔の見解と考えて支障はないと思われる。とすれば、清輔の兩人に対する実作の評価はどのようなものか、公任の優劣論については後述することとして『続詞花集』入集歌において検討する。清

輔は『統詞花集』に和泉式部十三首、赤染衛門十三首の同数を採用している（崇徳院十八首、覺性十六首に続く上位入集である）。『詞花集』の場合、和泉式部十六首、赤染衛門八首、また『千載集』の場合、和泉式部二十一首、赤染衛門六首であり、『統詞花集』前後の勅撰集での兩人のあつかいをみると、歌数において和泉式部がかなり優勢である。すなわち、兩人の作を同数入集させている清輔は赤染衛門に他にない価値を見出しているように考えられる。

一

赤染衛門の『統詞花集』入集歌十三首を次に掲載する。^{注4}なお、頭に便宜的な通し番号を付し（一）内に集中の歌番号と部立を挙げる。

竹の葉にをける霜のとけて露のやうにておつるをみて

1 竹の葉にむすへる霜のとけぬれはもとの露ともなりにける哉（三〇

二、冬）

此身如夢

2 ゆめや夢うつゝやゆめとわかぬかないつれよにかさめむとすらん

（四六〇、釈教）

人のむすめのおさなきをかたらふにまたてもかゝすとてかへり

こともせさりければ挙周朝臣にかはりて

3 わかの浦のしほまにあそふ濱千鳥ふみすさふらんあとなおしみそ

（四九八、恋上）

十月斗人にかはりて女のもとへ遣しける

4 霜かれの野へに朝吹風の音の身にしむはかり物をこそ思へ（五三
八、恋上）

泉式部道貞にわすられて程なく帥宮へまいるときゝて

5 うつろはてしはし信田の杜を見よかへりもそする葛のうら風（六三

〇、恋下）

むすめの許にかよふおとこのかりにまかるになむとてたちをこ

ひにをこせたりければつかはずとてむすひつげゝる

6 かりにそといはぬさきよりのまれすたちとまるへき心ならねは

（六五五、恋下）

たこにてよみ侍ける

7 おもふことなくてそみましよさの海のおまのはし立宮古成せは（七

二九、旅）

野ちかきところによるとまりてむしのいたく鳴ければ

8 一夜たにあかしかねぬる秋の野になくゝすくる虫そ悲しき（七三

三、旅）

匡衡朝臣うせて後石山へまうてける道に山かけなる草の露にあ

さひのさしたるを見て

9 朝日さす山下露のきゆるまもみしほとよりはひさしかりけり（八三

一、雑中）

上東門院にまいりて一条院に匡衡か御書をしへたてまつりしほ

とのことなと昔物語啓してまかりいてにけるあしたにたてまつ

りける

10 いとゝしく又ぬれそひし袂かなむかしをかけておちし涙に（八三

三、雑中)

おもふ事ありけるころよふくるまで月をみて

11物おもはぬ人もや今宵なかむらんねられぬまゝに月をみるかな(八

四一、雑中)

おとこのよをむなしとしりなからきみにさはりてそむかぬこと
ゝいひたりける返事に

12われもなし人もむなしと思なは何か此世のさはりなるへき(九〇

三、雑下)

鯛といふいほに梅の花をかさして人のをこせたりけるかかのつ
きたりければ

13春ことにさくら鯛とそきゝしかと梅をかさせるかそつきにける(九

八四、戯吟)

以上の赤染衛門詠は、7を除いて流布本系の家集『赤染衛門集』を
撰集資料としていると考えられ、7は『玄々集』からの採用であろう
と思われる。^{注6}また、十三首のうち、3、8、13を除く十首が後の勅撰
集に入集している。^{注6}

部立をみると、冬一首、釈教一首、恋四首、旅二首、雑四首、戯吟
一首となる。冬に部類される1は竹の葉と露の伝統的な趣向をとらえ
て霜がとけて露になったという観察をふまえた繊細な風情を詠んだ作
である。ただし、『続古今集』では匡衡の作(五九五、冬)となつて
いる。2は『新古今集』入集歌(一九七三、釈教)で、その詞書に
「維摩經十喻中に此身如夢といへるころを」とあるように、『維摩
經』の趣旨を直叙した作である。^{注7}3から6までは恋を主題とする作で

あるが、3は幼い子息挙周のために代作したものであり、4も代作。

5は後述するように和泉式部との贈答歌であり、恋愛の主体となるの
は和泉式部の方である。6は娘の代りに娘の恋人にあてて詠んだも
の。このように恋部に部類(配列上、様々な恋の段階に位置してい
る)されているものの、赤染衛門自身の真情を詠嘆した作はみられな
いのである。換言すれば、詞書によって示される代作という詠歌事情
によって赤染衛門という歌人の創作姿勢が示唆される結果になってい
る。ところで、7、8の旅の部立中の作をみると、体験に基づくと思
われる実情の横溢する詠歌であつて、また雑に入集する、石山寺に参
詣して亡夫匡衡を回顧する9、匡衡の記憶をめぐる心情を吐露した
11、赤染衛門の人物を彷彿とさせる12なども同様に実感の詠歌であ
る。恋の代作歌や身近な体験を通じての率直な感情の表現などは、家
集にみられる特徴^{注8}でもあり、家集を熟読し撰集資料として用いた清輔
の着実な鑑賞態度が認められる。

『詞花集』^{注9}には赤染衛門詠は八首入集している。子日を題材とする
慶賀の屏風歌(七、春)、法輪寺参詣の時嵯峨野の秋の花を詠んだ歌
(一一一、秋)、さかきばを素材とした賀の歌(一六四、賀)。屏風歌
や賀の歌は『続詞花集』が閑却したところのものである。「をとこに
わすられてなげきけるころ、八月許にまゑなる前栽の露をよもすから
なかめてよめる」と詞書のある歌(二四五、恋下)、「いたくしのひけ
るをとこのひさしくおとせさりければいひつかはしける」と詞書にあ
る歌(三一八、雑上)、「おもふことはへりけるころいのねられす侍け
れは、夜もすからなかめあかしてありあけの月のくまなく侍けるか、

かきくらしくれけるを見てよめる」と詞書にある歌（三二三、雑上）、以上の三首はうち二首が雑に部類されているが、恋の趣向のみえる作である。しかし、二四五および三二三の作は例えば流布本系家集^{注10}での詞書は「秋の夜、ひとりなきあかして」、「十月にありあけの日のいみしくあかきに、にはかにかきしくれ、またうちあかりつゝあはれなるを、ひとりなかめて」とあって（三一八は家集にみえない、あるいは代作かと憶測する）、現存家集でみる限り必ずしも『詞花集』の詞書によって設定されているような恋の状況を前提とした作とは言えないと思われる。また挙周が病気の折の母親としての悲痛な詠嘆（三六一、雑下）、匡衡をしのぶ歌（三九九、雑下）などは『統詞花集』中の歌に共通した傾向の作である。『千載集』^{注11}には赤染衛門詠は六首入集している。「落花満山路といへる心を詠める」という詞書のある「踏めば惜し踏までは行かむ方もなし心尽しの山桜かな」（八三、春歌下）は、流布本家集で「またいみしくみるところに、庭のまもなくおかしく見えしに」の詞書で「ふめはおしふますはゆかん方もなしちりつむにはの花桜哉」、桂宮本で「花見にありきしに、ちりつもりて、いと見ところあるほとなりしに」の詞書で「ふめはおしふまねはゆかむかたもなしちりつむ庭の花桜哉」とある詠歌と関連があると考えられるが、詞書や詞句に異同があり、庭に咲く桜と山桜という素材も相違していて、直接の繋がりを想定することは困難である。現存家集以外を資料とした可能性が高い（詞書から推定するに、おそらく家集以外の資料、例えば歌合などから採用したと考えられる）。「山寺に詣でたりける時、貝吹きけるを聞きて詠める」という詞書の

ある「今日もまた午の貝こそ吹きつなれ羊の歩み近付きぬらん」（一九六、雑体）は釈教的な内容をもつ俳諧歌であるが出典は不明である。以上の二首を除く四首はすべて『統詞花集』入集歌との共通歌である。五〇三（露旅歌）は7、五六五（哀傷歌）は10（上東門院の返歌ともども入集、九一二（恋歌）は6、九八一（雑歌上）は11であり、詞書、詞句を家集などと比較検討すると『統詞花集』に依拠し参考^{注12}にしていることが確認できる。俊成は赤染衛門を「千載集」において高く評価しているとは言い難く、結果的に清輔の評価をほとんどそのまま踏襲していると考えられるのである。

一一

清輔が赤染衛門に関心をもち家集を熟読していた証は「袋草紙」に知ることができる。「袋草紙」（上巻）には、前述の公任による優劣論を引用する部分の他に、雑談と希代歌の項に三箇所、赤染衛門の名が見出せる。ひとつは、公任が一条院に提出する上表文を匡衡に依頼したところ、妻の赤染衛門の助言によって、匡衡はみごとに公任を感歎させる趣旨の上表文を書くことができたという説話で、清輔は話末に「是以和歌之思高巧出事者、有^レ興云々」と記して赤染衛門を称揚している。また、雑談に次のような説話がみえる。

中関白為^二少将^一之時、語^二赤染之兄弟女^一、而忘給之後、彼女奉^レ恋^二関白^一、日暮卷^二上南面簾^一テ、ナガメ居。然間直衣人寄、香甚入来。彼殿也。女有^二悦心^一会合。其後夜々来。但晓夕無^二車馬音^一。

以^レ長緒著^レ針、著^レ直衣袖。朝、此緒留^ニ南庭樹上。其後無^レ來。是魅之所為歟。又、件女懷任、臨^レ期産^ニ一胞衣。開^レ之見^レ之、多有^レ血無^ニ他物云々。見^レ江記。赤染歌、

ヤスラハデネナマシモノヲサヨフケテカタブクマデノ月ヲミシカナ

中関白道隆が赤染衛門の姉（あるいは妹）と親しくなったことに発端する以上のような「江記」に基づく怪事件を記してのち、「江記」を再び引用し、赤染衛門は赤染時用の娘であるが、実は兼盛の子であるという異常な出生のてんまつを書いている。さて、赤染歌として清輔がひいた「やすらはで……」の有名な作は『後拾遺集』に「中関白少将にはべりける時、はらからなる人に、ものいひわたり侍けり。たのめてまうでござりけるつとめて、女にかはりてよめる」の詞書で入集しており、流布本家集には次のようにみえる。

中関白殿の、藏人の少将と聞しころ、はらからのもとにおはして、内の御物忌にこもるなり、月のいらぬさきにとて出給にしのちも、月ののとかにありしかは、つとめてたてまつれりしにかはりて

入ぬとて人のいそきし月影は出での、ちも久しくそ見し
おなし人、たのめておわせすなりにしつとめて奉れる
やすらはてねなまし物を小夜更てかたふく迄の月をみし哉

清輔は「江記」にある不思議な説話を裏付けるために、家集などからうかがわれる事情をふまえて、代作歌一首を書きとめたと思われる。いまひとつは、希代歌の項目に「仏神感応歌」として次のように

ある。

赤染衛門

カハラムトオモフイノチハラシカラデサテモワカレム事ゾカナ
シキ

タノミテハヒサシクナリヌスミヨシノマツコノタビノシルシミ

セナム

チヨセヨトマダミドリコニアリシヨリ只スミヨシノマツヲイノ

リキ

是ハ江挙周、和泉去^レ任之後、重病悩而有^ニ住吉之御崇之由、仍奉^ニ幣彼社之時、三本幣ニ各所^レ書歌也。其時人夢ニ白髮老翁社中ヨリ出来テ、取^ニ此幣^ニテ入、其後病平癒云々。

以上の、住吉の神のたたりで子の挙周が重病にかかったというので住吉社へみてぐらに歌を書いて奉納したところ効験あつて挙周の病気が平癒したという説話は『今昔物語』巻第二十四、『古本説話集』巻上「赤染衛門が事」、『宝物集』（一巻本）、『十訓抄』第十「可^レ庶^レ幾才能芸業^ニ事」、『古今著聞集』巻第五和歌および巻第八孝行恩愛、『沙石集』第五末「神明ノ歌ヲ感じテ人ヲ助給ヘル事」などの説話集にもみられるが、説話集においては和歌は「かはらむと……」の一首のみ（『古本説話集』は二首で「たのみては……」も載せている）であり、また『今昔物語』『古本説話集』『宝物集』には「其時人夢ニ白髮老翁社中ヨリ出来テ、取^ニ此幣^ニテ入」にあたる部分がなく、『古本説話集』と『宝物集』は挙周が和泉へ赴任する途中で病気になるという内容である。さらに、「かはらむと……」は『詞花集』入

『続詞花和歌集』の一考察

集歌(三六一、詞書は「大江挙周朝臣おもくわつらひてかきりにみえ侍ければよめる」、なお前述)、「たのみては……」は「後拾遺集」入集歌(一〇七〇、詞書は「挙周和泉の任はてまかり昇るまゝにいと重く煩ひ侍りけるを住吉のたゝりなどいふ人侍りければみてぐら奉り侍りけるにかきつけゝる」)であり、流布本家集には次のようにある。

挙周かいつみはてゝのほるまゝに、いとをもうわつらひしに、
すみよしのしたまふと人のいひしか、みてくらたてまつられし
にかきつけし

たのみては久しくありぬ住吉のまつこのたひはしるしなみせてよ
千世へよとまたみとりこに有しよりたゝすみよしの松をいのりき
かはらむといのる命はおしからてわかるとおもはん程そかなしき
奉りての夜、人の夢に、ひけいとしろき翁、このみてくらを三

なからとるとみて、おこたりき

以上のように、説話集にない歌を含めて家集にみえる三首の歌を列挙していること、家集の詞書や注記が『袋草紙』の本文と類似していることなど、『袋草紙』中の記事が流布本家集を資料のひとつとして書かれた蓋然性は高い^{注13}と思われる。なお付言すれば、『袋草紙』中の説話に示される赤染衛門像と『続詞花集』入集歌の特徴はほぼ一致する方向にあることも指摘され得る。

和泉式部の『続詞花集』入集歌十三首を赤染衛門の場合と同様に次に掲載する。

1 たのめたる人はなけれとあきの夜は月みてぬへき心こそせね^{注14}(七一、秋上)

花山院哥合露をよみ侍ける

2 玉かどてとれは消ぬる白露を置なからこそみるへかりけれ(二四〇、秋下)

心ならず人にしたしくなりて

3 是も又さそなむかしのちきりそと思ふ物からあさましきかな(五五六、恋中)

4 夢にたに見てあかしたる暁のこひこそ恋のかきりなりけれ(五九六、恋中)

人ものかたりして侍けるほとに又人のきたりければたれも
くかへりにけるあしたにいひつかはしける

5 中空にひとりありあけの月をみてのこるくまなく身をそしりぬる(五九九、恋中)

いくかさねといふ古ことをいへる人に

6 とへとおもふ心そたへぬわするゝをかつみくまのゝうらのはまゆふ(六〇四、恋中)

帥宮おはせて後より侍ける

7 寝覚する身を吹とをす風の音を昔は耳のよそにきけむ(六二五、恋下)

返し

8 秋風はすこく吹とも葛のはのうらみかほにはみえしとおもふ（六三二、恋下）

かき絶て音せぬ人に

9 うらむへきこゝろはかりは有物をなきになしてもとはぬ君哉（六四二、恋下）

二、恋下）

おとこにわすられてなけき侍けるころ霜のふれるあしたに人のもとへつかはしける

10 今朝しもおもはむ人はとひてまし妻無聞のうへはいかにと（六六四、恋下）

四、恋下）

はなれにけるをとこのとをき程へ行をいかゝ思ふといひたる人

11 別でもおなし都にありしかはいと此たひの心ちやはせし（六九五、別）

別）

かたらふおとこのもの人いみしくはらたつときくにたかうなをやるとていまの人のよませ侍けるに

12 かはらしやたけのふるねはひとよたにこれにとまれるふしはありや

は（八〇六、雑中）

少将井原大原よりいてたりときゝて

13 よをそむくかたはいづくにありぬへし大原山はすみよかりきや（八九三、雑下）

九三、雑下）

以上の和泉式部詠は『和泉式部集』正集にみえるもの、1、2、

6、8、9、10、11、続集にみえるもの、3、4、5、7、12であり、13を除いて、すべて『和泉式部集』を撰集資料としていると思わ

れる。^{注16} 13は少将井原との贈答歌（次の八九四は少将井原の返歌）で、少将井原には現存しないけれども家集があったと考えられるので、おそらくは少将井原集から採用した作と思われる。十三首のうち、2、10、12を除く十首が後の勅撰集に入集している。^{注18}

部立をみると、秋二首、恋八首、別一首、雑二首となり、恋に部類される作が中心である。1「たのめたる人はなけれどあきのよは月みでぬべき心ちこそせね」は、『詞花集』恋下は和泉式部作、「たけの葉にあられふるなりさら〜」に一人はぬへき心ちこそせね」（二五三）詞書に「たのめたるをとこをいまやとまちけるに、まへなるたけのはにあられのふりかゝりけるをきゝてよめる」とある類想歌がみえ、恋の情緒を含む作であることは明らかである。2は家集の詞書では「又十たい」の中の「露」という題詠を示すのみであり、『続詞花集』は花山院歌合として詞書を書き改めていると考えられるが、2が作られる直前に催されたと思われる寛和元年内裏歌合で露の題にて花山院が「荻葉における白露玉かとして袖に包めどたまらざりけり」と詠んでいる作に着想表現が似かよっており関係があるかと思われる。花山院詠には恋を連想する艶なる趣がうかがわれ、その作を受けたとすると2も同様に享受することができるといえる。恋部に配置される歌群は、いづれも奔放（3、5、6、8）かつ熱情的（4、7、9、10）な作であり、素材、技巧にも個性で力強い様式（例えば「あさましきかな」「晝のこひこそ恋のかぎり」「のこるくまなく」「みくまの浦の浜ゆふ」「昔は耳のよそに聞きけむ」「うらみがほにはみえし」「なきになしても」「妻なき聞の上」などの表現）が注目される。別部の11、雑部の

12も恋の状況を含む作である。

『詞花集』の入集歌は十六首、『千載集』は二十一首で、前後の勅撰集に比較して『統詞花集』に和泉式部に対する目立って高い評価はみられない。また、『千載集』中の二十一首のうち、『統詞花集』との一致歌は3、9、11の三首であるが、3は初句「これも又」が家集、『千載集』では「これも皆」で異同があり、さらに3、9ともに『千載集』の詞書は「題知らず」であって、おそらくは、和泉式部詠の場合、『千載集』入集に際して『統詞花集』は介在していないと考えられ、赤染衛門の場合と異なり、俊成は清輔の評価を意識することが少なく、^{注19}言い換えれば独自の和泉式部観をうちだしていると思われる。さて、『新古今集』には和泉式部詠は十五首が入集しており、うち四首が『統詞花集』との共通歌である。四〇八(秋歌上)は1、七八三(哀傷歌)は7、一六三八(雑歌中)は13(少将井尼の返歌一六三九とともに採用)、一八二一(雑歌下)は8(赤染衛門の贈歌一八二〇とともに採用)となり、詞書や採用方針などからみて家集から直接でなく『統詞花集』から採ったと思われる(少なくとも7、8、13に関して)それぞれの撰者名注記をみると、1は定家単独、13は有家、家隆、雅経の三人であり、7と8は有家の単独である。すなわち、四首のうち三首が六条家を代表する有家によって選択されていることとなる。^{注20}清輔の和泉式部に対する評価の一部は有家に継承され、『新古今集』にいかされているのである。

清輔が『和泉式部集』を読んでいたことの一例として嘉応二年十月九日散位敦頼住吉社歌合(歌合の呼称は平安朝歌合大成による)にお

ける社頭月四番左の清輔詠「月かけはさえにけらしな神垣やよる辺の水につららるるまで」に対する俊成の判詞と清輔の陳難(『夫木抄』卷廿六所収)に次のようにある。

此歌判者俊成卿云、左歌「よるべの水につららるるまで」などいへる文字つづき宜しくは見ゆるを、おぼつかなき事どもぞ侍める。まづ、「よるべの水」といふことは、源氏の物語にも、賀茂の祭の日の歌に、「さもこそはよるべの水も水草るめ」とよめり、みたまへし。さらでは古き歌にも見え及び侍らず。この水を、おろおろ承はるに、たとへばいづれの社にも侍らめど、まづ当社の御前の月には、海の面水を磨き、浜の真砂玉を敷けらむをばおきて、よるべの水にむかひて月はさえにけらしなど思はむ事やいかがと云々。作者清輔朝臣云、よるべの水はいづれの社にも侍るにこそ。又、歌によめる事、源氏のみにあらず、和泉式部集などは御覽せざりけるにや。又、月よむべき所は多かれど、風情に随ひてこそよめるかし。姥捨山などをとり集めて尽すべしと不存事也。姥捨山高き名なりとて、月の歌ごとにそれをよみて余山をよむまじきにやと云々。

右の歌合における俊成の判には清輔の実証主義に対する当てこすりの発言がみられると言われ、^{注21}以上の判詞にも術学的傾向がうかがえる。俊成の難じた「よるべの水」について、清輔ははやく『奥義抄』で言及している。歌合での清輔詠の本歌とみられる古歌「神さびてよるべにたまるあまみづのみくさるるまでいもを見るかな」(『万葉集』にはみえず出典不詳)を挙げ次のように解釈している。

これは神社にかめをおきて、それなる水を、なき事などおひたるものは神水とてこれをのむ也。たゞすの杜などに今もあり。和泉式部歌にも、

神かけてきみはあらがふたれかさよるべにたまるみづとい

ひけむ

又源氏のおふひのうへの歌云、

さもこそはよるべの水にかけたえめかけしあふひをわするべ

しやは

これらもかのかめのみづをよめる也。

和泉式部の引用歌は正集、続集ともにみえる（正集によると「なにごとゝしらぬ人にはゆふたすきなにかたゝすの神にかくらん」に対する返歌）。「源氏物語」からの引用は不正確であり、幻の巻にみえる中将の君の歌「さもこそはよるべの水に水草あめけふのかざしよ名さへ忘るる」を指すと思われ、俊成の判詞中の引用も同様に考えられる。

なお「奥義抄」の釈は「和歌色葉」の難歌会釈に引用され、「八雲御抄」巻第四言語部には「よるべの水」の項があり「源氏物語」幻の巻を指摘し嘉応住吉歌合の俊成判を引く。また「袖中抄」は「よりべのみづ」の項目を立て「源氏物語」中の作（「奥義抄」引用と同歌）を抛りどころに比較的詳しく説明している（ただし和泉式部歌を「源氏歌」と混同している）。難義であった「よるべの水」に拘泥した俊成の意識には「奥義抄」の記事があったのかも知れない。^{注22}ともかく、清輔はやくから「和泉式部集」を古歌の証歌に挙げるほどに研究していたと考えられる。

おわり

長明「無名抄」^{注23}は和泉式部と赤染衛門との勝負に関して或人と長明との問答を載せている。或人が、清輔が「袋草紙」に言及したところの、「俊頼髓脳」にみえる公任の説を挙げ、二つの不審を唱える。すなわち「一には式部を勝れる由理られたれど、其比のしかるべき会、晴の歌合などを見れば、赤染をば盛りに賞して、式部は洩れたる事多かり。一には式部が二首の哥を今見れば、『遙かに照せ』と云ふ哥は、詞も姿もことの外にたけ高く、又景気もあり。いかなれば大納言はしか理られけるにか。かたゝおぼつかなくなん侍る」とある。或人の第一の不審に対して長明は次のように解釈している。和泉式部を優れているとするのは、公任だけに限らず、今では世間一般が和泉式部を優位に考えている。しかし、同時代においては人がらによって勝負が決定する場合がある。「哥の方は式部左右なき上手なれども、身のふるまひ、もてなし、心持ちなど、赤染には及び難かりけるにや」であり、『紫式部日記』の兩人に関する評にもある通りであって、「其時は人さまにもち消たれて、哥の方にも思ふほど用いられねど、真には上手なれば秀哥も多く、ことに触れつゝよみ置く程に、撰集共にもあまた入れるにこそ。」要するに和泉式部が、生存当時には赤染衛門の方が晴の会などで歌人として活躍しており人々の評価が高いのに対して不遇であったのは、歌人的資質によるのではなく、主として人格的な意味による結果である。没後に勅撰集にも多数入選している

ことでわかるように歌人としてより秀れた才能をもっている。

公任は「津の国のこやとも人のいふべきにひまこそなけれ蘆のやへぶき」の作を巧緻な風情、技巧を認めて和泉式部の代表的な秀歌とし、世の人が秀歌と考える「暗きより暗き道にぞ入りぬべきはるかにてらせ山の端の月」を経文の翻案としてしりぞけている。公任の論断は、或人の第二の不審である。これに対して長明は「公任卿の理のいはれぬにもあらず、今の不審の避事にもあらず。」と相方の言い分を認め「哥は作りたてたる風情、巧みはゆゝしけれど、哥品を定むる時さしもなき事もあり。又、思ひ寄れる所は及び難くもあらねど、打聞くにたけもあり、艶にも聞えて、景気浮かぶ哥も侍るぞかし。」と一首の特徴（前者が「こやとも人を」、後者が「遙かに照せ」を示す）を洞察して「歌よみの程を正しく定めんには、『こやとも人を』と云ふ哥を取る共、『式部が秀歌はいづれぞ』と選ぶには、『遙かに照せ』と云ふ哥の勝るべきにこそ。」と結論づけている。さらに、たとえてみれば「遙かに照せ」は宝である黄金、「こやとも人を」は大変巧みに作られた櫛、針の類であって、路傍に黄金をみつけてもその人の手柄ではないが、針の類は宝でなくとも上手のしわざと言ひ得るのであり、公任の説は右のことをふまえたものと長明は述べ、「哥の善悪も世々に変わるものなれば、その世に『こやとも人を』と云ふ哥の勝る方もありけるを、なべて人の心得ざりけるにや、後人定むべし」としめくくっている。^{注24}

長明の卓抜な試論をふまえて、同じく「袋草紙」において公任の優劣論を載せた清輔の場合を考えてみると、まず、和泉式部と赤染衛門

の優劣に関して、公任説に従い歌仙として和泉式部を優位に置いているたかと言え、必ずしもそうとばかり言えないと思われる。「統詞花集」入集歌について検討すると、むしろ時代の趨勢とは違い、赤染衛門に相当の価値を見出ししており、しかも「江記」に記された良暹の説のように屏風歌にはなく、前述したように家集を熟読した成果の上に立つ赤染衛門の特徴を把握していたと思われる。また、和泉式部の秀歌に関して、長明はたけ高く、景気のある「遙かに照せ」の作を推称したが、清輔は『統詞花集』中の和泉式部詠をみる限り、「作りたてたる風情、巧みはゆゝし」と長明の言う、「こやとも人を」の作を公任同様に「凡夫可思寄事に非ず」と考えて評価していたと思われる。やはり、家集を清輔なりに読んでいた結果である。

〈注〉

- 1 拙論「清輔と能因法師」(『ブディスト』第13号、昭和五十七年七月二〇日、東方界、なお本論文は「統詞花集をめぐる一考察」と題した研究発表△和歌文学会第十九回関西例会の一部分である)参照。
- 2 日本古典文学大系『枕草子 紫式部日記』(岩波書店) 四九五頁参照。
- 3 『袋草紙』のテキストは『袋草紙注釈上』(小沢正夫、後藤重郎、島津忠夫、樋口芳麻呂共著、塙書房)の本文を用いる。以下同様。
- 4 『統詞花集』は本稿では陽明叢書『中古和歌集』(思文閣)所収の陽明文庫本をテキストにする。
- 5 河合一也氏「統詞花集の撰集資料について」(『語文』第五二輯、昭和五十六年六月)に指摘がある。
- 6 6、7、10、11が『千載集』に、2、5が『新古今集』に、12が『統後撰集』に、1が『統古今集』に、9が『統後拾遺集』に、4が『新拾遺集』にそれぞれ入集している。なお、2は家集や『新古今集』では四句は

「いかなる世にか」とみえる。10は家集や『千載集』では上句は「つねより」とみえる。(清輔の改作とすれば、原作の表現に何らかの注文を付けたことになるか。)

7 石原清志先生『釈教歌の研究』(同朋舎出版) 四二五頁参照。

8 真鍋櫻子氏「家集から見た作家の像——歌人赤染衛門の性格——」『国語と国文学』昭和三年七月) 参照。

9 『詞花集』は笠間叢書『詞花和歌集』(井上宗雄、片野達郎校注)をテキストにする。

10 流布本『赤染衛門集』は私家集大成(中古Ⅱ)に所収のⅠ(榊原家本)を用いる。

11 『千載集』は笠間叢書『千載和歌集』(久保田淳、松野陽一校注)をテキストにする。

12 九一二は詞書から明らかに『統詞花集』中の6をそのまま採用している。五〇三の場合、家集にみえない作で、『千載集』での詞書は「丹後国にまかれりける時、詠める」であり、『統詞花集』は「たこにてよみ侍ける」、『玄々集』は「丹後にくたりて」とあるので、『玄々集』に近いといえる。五六五の場合、家集、『統詞花集』、『千載集』それぞれ詞書に異同があり、にわかには判断しにくい。注6で前述のように『統詞花集』中の10は初句が「いとどしく」で『千載集』、家集は「常よりも」であるので、あるいは家集を優先させたとも思われる。九八一「一題知らず」で入集している。

13 流布本家集にある「奉つりての夜、人の夢に、ひけいとしろき翁、このみてくらを三ながらとるとみて、おこたりき」という説明文について、注8に挙げた真鍋氏論文は、後に説話から逆に混入したことも考えられるが、そうとは言いきれないことをいくつかの論点から論じ、積極的なきめ手はないとしながら、赤染衛門自身によって書かれたことが十分考えられることを指摘している。

14 群書類従本では結句は「心ちこそすれ」であるが、家集や『新古今集』では「心ちこそせね」であるので、一応テキストに従う(天理図書館蔵

『統詞花和歌集』の一考察

本、三手文庫蔵本なども同じ、なお例えば三手文庫本の朱の注記によれば、家集では「心ちこそすれ」とあるとみえるが未調査。

15 詞書中の「いかが思ふといひたる人」は「赤染衛門集」によると赤染衛門である。すなわち「みちさたまちのくに、なりぬと聞いていつみしきふにやりし」の詞書で「行人もとまるもいかに思ふらん別てのちのまたのわかれば」とみえ、返しが11の和泉式部の作である。

16 吉田幸一氏『和泉式部研究二』(古典文庫)に指摘がある。吉田幸一氏は宸翰本などを含めて考察されているが、本稿では正集、続集に限り検討した。正集、続集はもと一体であったと想定でき、原型和泉式部集が存在したとの説に従う。

17 上野理氏『後拾遺集前後』(笠間書院) 二七八頁参照。

18 3、9、11が『千載集』に、1、7、8、13が『新古今集』に、4が『新勅撰集』に、6が『統後撰集』に、5が『玉葉集』にそれぞれ入集している。

19 ただし、9は「古来風体抄」に抄出している(『千載集』からは和泉式部詠は9を含めて四首)。

20 茶田智子氏「藤原有家論」(『大谷女子大国文』第八号)は、『新古今集』撰集の際、撰者有家が『統詞花集』を資料に使用したことを論じている。

21 平安朝歌合大成の本歌合解説参照。また久保田淳氏『新古今歌人の研究』(東京大学出版会)は、「よるべの水」についての俊成の発言はやや術学的であるが、判詞後半は「社頭月」の題の本意をよく理解しているもの言であると論じている(四七五頁)。谷山茂先生「俊成と清輔」(『国文学』昭和四二年八月初出、著作集三卷所収)は判者と作者それぞれの態度について詳細に論じ、「よるべの水」に關しては俊成の勇み足に対する清輔のあげ足とと説いている。(著作集第三卷四四六頁)

22 『奥義抄』の成立について日本歌学大系第一巻解題を参照。また井上宗雄氏「平安後期歌人伝の研究」(笠間書院)は「奥義抄は長い期間書き続けられて内々成立していたにしても、清輔が久安百首の作者となって院に名を知られた後、久安後半に進上されたのではないか。」と述べ、久安七

『統詞花和歌集』の一考察

年前後ころ、俊成は院から『奥義抄』を見せられたのではないかと推論する(一二四頁)。

23 『無名抄』は日本古典文学大系『歌論集 能楽論集』(岩波書店)をテキストに用いる。

24 和泉式部の秀歌論は『西行上人談抄』にもみえるが、公任説のままに「隙こそなけれ」を勝っているとする。